「源氏物語」の学習指導

――螢の巻・高三のばあい――

広瀬節夫

Ⅰ はじめに
Ⅱ 教　材
Ⅲ 学習目標
Ⅳ 指導過程
Ⅴ かれらのうけとめたもの
　　―感想メモから―
Ⅵ 問題と反省

Ⅰ はじめに

「源氏物語」の教室の中から、とくに螢の巻をとりあげて、その評論的な側面としての物語論について、（1）それをどのように読ませ、（2）それがどのように享受されたかをふりかえりながら、その指導上の問題点をさがしてみたい。

Ⅱ 教　材

使用した教科書は、遠藤嘉基編「古典文学」（中央図書）で、取り扱った巻々は、桐壺・夕顔・若紫・葵・須磨・螢・御法である。

取り扱った時間は、国語（乙）として、一週に二時間、のべ約三〇時間を使った。

関連のある教材としては、国語（甲）の時間に、「源氏物語玉の小櫛」（国語総合三〈日本書院〉）を、漢文の時間に「長恨歌」（高等新漢文三〈三省堂〉）を、補習の時間に「無名草子―紫式部―」（古文問題要選二〈日栄社〉）を学習している。

なお、螢の巻で読だ本文の範囲は、「長雨、例の年よりもいたくして、明るるかたなくつれづれなれば、御方方、絵物語などのすさびにて、明かし暮し給ふ。……（中略）……。よくいへば、すべて何事もむなしからずなりぬや。』と、物語をいとわざとのことにのたまひなしつ。」である。本文の下欄には、くわしい注釈がつけられてお

り、光源氏の会話文の終わりには、「ここまでの源氏の、物語に対する考えを整理してみよう」というような設問がつけられている。

Ⅲ　学習目標

「源氏物語」をとおしての学習目標として次の二つのものをめざした。

1「源氏物語」の文章の特色を理解し、古典の読解力を養う。

2平安朝の人々の思想と生活を知り、「源氏物語」の物語文学としての特質を理解する。

右の目標にしたがって、次のような「研究の手びき」を取りあげてみた。

(1) 各巻に登場する主要な人物がどのような境遇や性格の人として描かれているか。

(2) それぞれの巻において、心理描写や自然描写がどのように行なわれているか。

(3) 作者は物語をどのような性質のものとして考えているか。

(4) 「源氏物語」には平安朝時代の時代的性格がどのようにあらわれているか。

(5) 「源氏物語」の文章にはどのような特色が見られるか。

螢の巻の時間では、(3) と (5) とをめざしてみた。

Ⅳ　指導課程

1、螢の巻までのあらすじ、登場人物の関係などについて説明する。テキストにあらすじ、系図などがのせられているので、それを利用して解説する。

2、読みかた、語いに主眼をおいて、生徒に読ませる。その際に朗読の録音（女のアナウンサー）などを聞かせることも効果的である。

3、作品の内容をとらえることに主眼をおいて、教師が範読し、あらすじをまとめさせる。たとえば、(イ) 主要人物はだれか（登場人物のはあく）、(ロ) 対話の主題はなにか（玉かづらと光源氏の対話のはあく）、などを着眼点にして、そのだいたいの内容をまとめていく。

4、文章の解釈（口語訳）を発表させる。そのばあい、次のような着眼点を与えておく。

a 語句の省略が多いこと。
b 敬語の使い方がこみいっていること。
c 一つの文が非常に長いこと。したがって次の諸点に注意すべきこと。
(イ) 主語と述語　(ロ) 語句の照応　(ハ) 挿入句
(ニ) 修飾・被修飾の関係　(ホ) 指示することばの示す内容　(ヘ) 対話と地の文の区別

これらにしたがって、本文では、次のようなことに注意して解釈するようにした。

a、語句の省略

(イ) 主語

「（　）はかられ給ひて」「（　）書き給ふよ」「……と（　）笑ひ給ふものから」「……と（　）のたまへば、」「（　）のたまひなしつ」

（ロ）係り結びの「結び」
「疑ひを置きつべくなむ。（　）」
（ハ）語句
「同じやまとの国のことなれば。（　）昔、今のに変はるべし。」
これについては、「同じやまとの国のことなれど、昔、今のに変はるべし。」となっている文もあるが、テキストにしたがった。

b、敬語の使いかた
（イ）尊敬表現
「御方方」「御目」「のたまへば」「のたまひなしつ」「暮らし給ふ」「営みおはす」「西の対には、ましてめづらしく覚え給ふことのすぢなれば、明け暮れ書き読み、営みおはす」
（ロ）謙譲表現
「奉り給ふ」「聞えおとしてけるかな」「思ふ給へられけれ」
（ハ）ていねい表現
「さもくみはべらむ」

c、長文として注意すること
（イ）主語・述語の関係

○よきさまに言ふとては、よきことの限りえり出で、
○人に従はむとては、またあしきさまのめづらしきことを取り集めたる、
（コトハ）
みな、∧かたがたにつけたる、∨この世のほかのことならずかし。

（ロ）語句の呼応
「女こそ、物うるさがらず、人に欺かれむ、と生まれたるものなれ。」
「げに、いつはりなれたる人や、さもくみはべらむ。」
「方等経の中に多かれど、言ひもて行けば一つ旨にありて、菩提と煩悩との隔たりなむ、この人のよきあしきばかりのことは変はりける。」
「かかる世のふるごとならでは、げに、何をか紛るることなきつれづれ慰めまし。」
（ハ）挿入句
「また、いとあるまじきことかな、と見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが、目覚きて、∧静かにまた聞くたびぞ憎けれど、∨ふとをかしきふしあらはなるなどもあるべし。」
（ニ）修飾・被修飾の関係

①その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることとこそなけれ、

④へ（逆接の関係）

②よきもあしきも、

④へ（連用修飾の関係）

③世にふる人のありさまの見るにもあかず、聞くにもあまることを、のちの世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、

（連用修飾の関係）

④心に籠めがたくて、言ひ置き始めたるなり。

（ホ）指示語の指示内容

「さやうのこと」「さもあらむ」「さしもあらじ」「さもくみはべらむ」「かかるすゞろごと」「かかる世のふるごと」「このいつはり」「この人」「その人」

（ヘ）対話と地の文

殿も、……御目に離れねば、
「（光源氏）……」
とて笑ひ給ふものから、
「（光源氏）　」
とのたまへば、
「（玉かずら）　」
とて、硯を押しやり給へば、
「（光源氏）　」
とて笑ひ給ふ。
「（光源氏）　」
と、……のたまひなしつ。

右にあげたように、文章の運びは、会話を中心としている。

d、語句の解釈

（イ）古今異義語

「ここら」「あはれ」「をかし」「うるはし」

（ロ）難語句

「すさび」「むつかし」「つきづきし」「かたくなしく」「こちなし」「ざえ」

（ハ）助動詞

「世にあべきかな」「しるし置きけるなり」

e、文章の構成

cの項であげたように、文章のほとんどは会話文になっている。つまり、光源氏と玉かづらの会話文がその中心になっている。なかでも光源氏のことばに作者紫式部の意図がある。

以上にのべたいろいろなことを解釈の留意点として、その口

語訳を試みさせた。こゝで取り上げたものは、源氏物語の文章の特色であり、これまでの巻々でもくわしく学習しているので、こゝでは それを 総合的にまとめることをめざしてみた。そして源氏物語読解の方法をはあくすることに、学習の重点をおいた。そのことがつねに文章の内容を理解することを目的としていることはいうまでもないことである。

5、文章の内容を整理させる。対話の中でも、光源氏のことばを中心にその内容をはあくさせる。

文章の段落にしたがって三つの設問を中心に、その内容をまとめさせた。

(イ) 絵物語の主な読者はだれであったか。それを読む目的は何であったか。

→貴族社会の女性。つれづれを慰めるもの。

(ロ) 源氏の最初のことばは、物語をどのようにはあくしているか。

① 「つれづれを慰めまし」「かかるすゞろごと」「はかなしごと」などの表現から物語を「つれづれを慰めるもの」として考えている。

② 「ここらの中にまことは少なからむを」「このいつはりどもの中に」などの表現から物語を「いつはりごと」と考えている。

③ 「あるまじきこと」からは、物語が現実にはありえないことを書いたものであるという意識を読みとることができる。

④ 「虚言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむ」からは、やはり物語を「虚言」と考えていることがわかる。

以上まとめると、光源氏は物語というものを現実的にはありえない「そらごと（いつはり）」であるときめつけている。これは、古物語に対する見解をのべたものだと思われる。

ところが、こゝで光源氏は、意外にも玉かずらから「そのいつはりごとの中にこそ真実性を見ることができる」という反論をうけることになる。あわてた光源氏は、そこでさきにのべた物語に対する考えを修正しなければならなくなる。そこに改めて、物語の本質論が語られることになるのである。

(ハ) 光源氏のつぎのことばでは、物語の本質をどのように語っているか。

① まず歴史的な記録にくらべて「これら（物語）にこそ道々しく委しきことはあらめ」とのべている。

② 物語を書く動機については、「世にふる人のありさまの見るもあかず、聞くにもあまることを、のちの世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひ置き始めたるなり」とのべている。

③ 「よきさまに言ふとては、よきことを取り集めたる、みな、かたがたにつけたる、この世のほかのことならず」というのは、物語を書くときの方法（手段）として、「虚構」ということを取りあげ、それが「真実」を描きうることをのべたものである。

④ さいごにのべた「仏の、いとうるはしき心にて説き置き給へる御法も、方便といふことあり、悟りなきものは、ここかしこたがふ疑ひを置きつべくなむ。方等経の中に多か

れど、言ひもて行けば一つ旨にありて、菩提と煩悩との隔たりなむ、この人のよきあしきばかりのことは、変はりける」というのは、「虚構」と「真実」との関係を「仏法」を比喩として説明しようとしたものである。

要するに、光源氏の語る「物語観」は、「物語には虚構によってかえって人生の真実が描かれている」というのである。そこに見られる虚構は、いかにすれば真実をより正しく読者に伝え得るかといった作者の生みの苦しみに由来するもので、虚構の形成自体に作者の目的があるわけではない。つまり、誇張も変改もすべて真実を読者にうったえるための芸術的、文学的手段であり、それによってこそ、皮相的事実は魂をもち、血の通ったものとなって、読者の心に強くせまるものがあるというのである。

いゝかえれば、「虚構の真実性」あるいは「真実の虚構による追求（または表現）」ということを、物語の本質として提示したということができるであろう。

この部分については、中村真一郎氏の『王朝の文学』（源氏物語の項）に次にあげるような現代語へのすぐれた飜訳がある。

「小説は、神々の時代以来の人間生活の現実を写したものだ。それに比べれば、『日本紀』のような史書などは、人生の或る一面を描いたものに過ぎない。小説の方にこそ、人間性の精緻な姿が表現されているのだ。……小説は、勿論、ある実在の人物の生活の記録ではない。作家の実人生の体験のなかで、善でも悪でも、感動の深かったものを、そのまゝ自分の心のなかに秘めておくことでは満足できなくて、後世のために書くことになったものだ。善でも悪でも、実際の経験を選択しながら、純粋の典型にまで高めて、それを表現する。それは例外的な状況を現しているように見えても、しかし、決して、非現実的なことではないのだ。外国の作家の作風は、私たちとは異っているかもしれない。又、時代によって、題材は異ってくるかもしれない。その上、作家の現実認識の度合の深い浅いの違いはあるだろう。しかし、決して、そのどれもが、真理に触れていないとは云えないのだ。」

さらに「フィクションによる現実再現が、事実の単なる記述である歴史よりはるかに、より真実である、と云う自信ある宣言は、ある種の『私小説家』の顔を赧らめさせるだろう」といい、それに「作家の体験と、それが『変換』された芸術的世界の中での現実像の関係」、「芸術的真実を作り上げるための、作家の個人的観察の整理と取捨の重要性」「実人生の日常性の、芸術のなかでの典型化の必要」「方法の多様性と文学的視力の度合の多種性」、また「それらを超越した、『小説形式』そのものの存在理由」などの明快な解説が加えられている、と述べている。

螢の巻の構成については、阿部秋生氏が「螢の巻の物語論」（人文科学紀要第24輯、昭36・3）の中で、「導入」「序論」「一般論」「比喩論」「経験談」の五部より成るという考え方をのべておられる。論理の構成をはあくしていくために参考になるものである。

6、評価する。とくに物語論の趣旨のはあくを中心としたテストとして、次のような問題を出した。

「その人のうへ……むなしからずなりぬや。」の趣旨と一致するものにはA、そうでないものにはBを、それぞれ解答欄に記せ。

ア、物語は作者の感激にもとづいて書かれたもので、事実をまったく無視している。

イ、物語には虚構によって人生の真実がゆがめられている。

ウ、物語には虚構によってかえって人生の真実が描かれている。

エ、物語の中に虚構があるのは、経文の中で菩提を説くのに煩悩を方便として説いてあるのと似ている。

オ、物語は仏法の教理と同様、善にみちびくための方便として書かれるものである。

その結果、まちがいのなかったもの（43%）、一つまちがったもの（26%）二つまちがったもの（21%）、三つまちがったもの（8%）四つまちがったもの（1.8%）、全部まちがったもの（0.2%）というようになった。二つまちがったものまでが九割を占めているということは、物語論の趣旨のはあくが大部分の生徒に一応なされていることを物語るものであろう。もちろん、どの項目について誤答が多かったか、正答が多かったかについても調べてみなければならないが、今は、それは保留したい。

V かれらのうけとめたもの
―感想メモから―

螢の巻の物語論を読むことによって、かれらの「源氏物語」に対する見かたはどのように変わってきただろうか。

かれらのうけとめかたは、次のA・B・C・Dの四つの類型に分けられる。

A、虚構と真実との関係をはっきりつかみ、これからの文学の読み方についての示唆をえたというもの。

「人間の求めるものは真実であって現実ではない。現実は真実を含んでいるがその全体が真実でない。現実を真実にもっていくためにはどうしても作り事をして真実をうきぼりにしなくてはならない。真実が得られたならば、虚構は姿を消す。読者は虚構の中にある真実をくみとる。」（H）

B、今までも、「源氏物語」を真実をあらわす虚構として読んでいたが、それを再認識したもの。

「虚構としっていてもいつも私は作中のある人物となって客観視してきたが、私はそれでよいと思う。だから今後もそうして行く。螢の巻に書かれている事が今私が読んでいる方法に確信をもたせてくれた気がするから。」（T）

C、この物語論を頭において、もう一度「源氏物語」を読みなおしてみたいというもの。

「物語論を読んで、源氏物語の内容に前より興味を感じた。この物語の真実性を見る上で須磨の秋を、もう一度読んでみたいと思う。」（S）

「螢の巻はこれまでの巻々と異っていて風景とか人物の描写のない物語論であった。だから通読しただけではちっとも面白味というものがないし、何だか頭の中で消化せねばならない文章と取れた。しかし源氏と玉かづらとの対話より両者の物語に対する観念とか、そういったものがわかった。とともに作者紫式部の物語に対する考えも間接的に大体理解できたのである。そういった意味から、今度は他の巻をただ単にその場面を空想し原文を解釈して文旨のわかる、そういうことだけでなく、作者、式部の気持を心において読み返してみたい。そうすればもっと源氏物語への理解が深まると思う。」（K）

D、作者に深くふれようとしたもの。

「虚構であるといえば、紫式部の主観的な考え、批判性の上に立って作られた物語であるにちがいない。しかしその中において私達は多くの客観性を見つけ出すことができる。紫式部の主観性が客観性に通じていたということは、彼女が純粋な目の持主であったにちがいない。複雑な社会に生きる私たちにもこんな純粋な目が欲しいと思う。そんな純純な読み方をし、虚構の中にも、私たちの生きるべき純粋な道をさがしてみたい。」（I）

「螢の巻では彼女、即ち紫式部の物語論がはっきり打ち出されている。はたして彼女は、これを書き始める以前から、こんな論を持っていたか、あるいは、この長編を書いていくうちに自分の物語論を確立したのか。現代の文学論と相似であるだけにより興味を感ずる。初巻から再読してみたい。」（Y）

Ⅵ　問題と反省

その1

螢の巻の物語論を読むことによって、かれらの「源氏物語」に対するせまりかたが、右に述べたように、深くもなり広くもなることができた。いいかえれば、単なる文学評論としてではなく、物語中の一主人公によって語られる物語論として、紫式部がどういう観点から自己の物語を読んでもらいたいかということをはあくさせることができた。つまり、螢の巻を物語の中の評論的側面として取り扱う意義を確認することができた。

その2

ところがこの物語論の内容をはあくすることはできるが、それをさらに発展させて考えようとしないものがいる。それらのほとんどは、「源氏物語」を読むことに興味を感じていない生徒である。これらの生徒に対してどのように考えていったらよいか。

その3

「源氏物語」をよんでいて最も障害（抵抗）を感ずるものをあげさせてみると、「叙述（表現）がむずかしい」と答えたものが圧倒的に多い。なかでもとくに「長文」であることに、その読解がさまたげられたことを指摘している。しかし、そのことが複雑な心理描写をしようとしたためのものであるということから、かえってそのような文章に魅力を感じたというものもいた。

そこで、「源氏物語」を指導するばあいその文章を、単に「むずかしい」ものとして取りあげるのでなくて、「なぜむずかしいのか」という読みかたをさせたいものである。

さらに、「徒然草」「枕草子」と比較して「源氏物語」が「なぜ三年生で取り扱われるのか」ということを考えてみなければならな

い。

岡村和江氏は、「徒然草の 和文体と 源氏物語・枕草子の文章」（解釈と鑑賞・昭37・11）の中で、「源氏物語」の叙述上の特徴として、次のようなことをあげておられる。

「1、物語は読ませて聞くものであったから、語られる雰囲気や語られた言語場―文脈―を大いに活用する。したがって登場人物の行動や会話を写すにあたり、一々主体の名を表わす必要がない。

2、話をなめらかに運ぶために話線を自在に続け、聞いて理解のできる範囲で長文になることがある。

3、登場人物の心理に話し手（作者）の主観をかけあわせ、客体描写とすることが多い。すぐれた心理描写、自然描写と評されている部分は、とかくこのような二重構造をもつ。（例文省略）

4、聞き手に流動感を与えるため、七音・五音をまじえてリズミカルにする。（例文省略）

5、暗んじられ口ずさまれているような古歌・詩文の名句をとり入れて、概念を二重映しにした美的効果をねらう。（例文省略）」

ここで取りあげられているような文章の特色を体得させたいものである。

その4

さいごに「源氏物語の現代語訳をこれから読んで みたいと思うか」というアンケートをとってみた。そして約九割のものが「読んでみたい」と答えた。このことは、原文に対する抵抗さえなくなれば、かれらは「源氏物語」に対して充分魅力を感じていることを物語るものである。ところが生徒の反省メモの中に次のようなものがある。

「我々は源氏物語にかぎらず、少なくとも学校で取りあげられる教材を、情緒的に読んだことはないのではないか。あるいはそのように読めないのではないだろうか。種々の全ての文章を情緒的に楽しみながら読むには、もう少し後になってからでなければ、それは無理だろう。構成と文意と文法に我々は追われている。」（Y）

そこで、（1）源氏物語の文学的生命にふれさせることを中心に考えるか、（2）原文に対する抵抗をなくするために古文の読解力を養うことを中心に 考えるべきであるか、 という問題が喚起される。

Y君の意見に耳を傾けると、文章読解に重点をおくことには限界があるのではないか。このような希望をおしつぶしていくうちに、若い人の古典理解への芽生えが、つみとられていくのではないだろうか。したがって、文学的な生命をうけとめさせるために、勇敢に現代語訳を与えてでも、「源氏物語」を読ませることがたいせつなのではないだろうか。

（この論稿は昭和37年11月11日（日）広島大学国語国文学会国語教育研究協議会で発表したものをまとめたものです。38・1・6）

（広島市立舟入高等学校教諭）